
B r e a k e r ' s

楚羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Breaker's

【Nコード】

N7203I

【作者名】

楚羅

【あらすじ】

最強の戦闘集団『breaker's』。その一人である『天道粹繕』(てんどうすいぜん)『breaker's』は解散して平和な日々を送っていた。

しかし、ある家族との出会いで粹繕は、また『breaker's』になることを決意する。

(一応コメディイです) bY作者

(前書き)

どうも。初めまして。作者の楚羅です。

初めての小説で面白さに欠けると思いますが読んで貰えれば嬉しいです。

では、さようぞ。

俺たちは、目の前の壁をぶっこわす！だから『Break
r・s』だ！

「ん……。」

懐かしいな。あの頃の夢。か。

あ、どうも。おはようございます。僕の名前は天道粹繕すいぜんと言いま
す。どうぞよろしくお願いします。

僕は此処『マイ・ホーム』にお世話になっています。此処は孤児
や家庭の事情で行き場のない子供を引き取ってくれる施設です。

「おーい。ゼン！起きてるか。起きてるなら今すぐ降りてこ
い。3秒以内な。」

今僕を呼んだ人は此処の施設を管理する『大和庄次郎だいわしやうじろう』さんです。

「はい。さーん。」

「1と2はああああ!？」

朝の6時に大声で叫びながら階段を疾走中。なぜそんなに必死になるかって?うん。聞かないで。お願い。

「はい。6秒。残念ですね。朝飯は50%カット。」

これで僕が必死になったのがわかりましたか?同情しないで。涙が出ちゃっから。

「ゼーッ、ゼーッ。ど、どうしたんですか?こんな朝早く。」

「喜べ!お前を是非養子に欲しいと言ってきてる人がいるんだ。」

「よ、養子に。ですか?」

「おう。で、もう来てるから。」

「は?」

「いや、だから。もう来てるんだって。その人。」

思考停止中。

「あまり待たせんの悪いから早くしろ。」

思考再開。で、何？養子？どういうこと？え？

「とりあえず。その頭。何とかして来い。はい。10秒以内な。」

「だあああああ！！！」

大声&全力疾走2回目。もう・・・、泣いていいですか？

「初めまして。天道粹繕君。私は『雨宮涼歌』よ。よろしく。」

僕に手を差し出してきた。えっと・・・、雨宮涼歌さん。やばいッ！凄く綺麗だ。肩まで伸びた黒くつやのある髪。目はタレ目で、唇はふっくらしていて柔らかそうだ。おっとりしているが、凛としている。どう見ても20代に見えるがなんと、実は40代だとい

う。嘘だ……。

「おい。ゼン。何やってんだ。」

「あ、すみません！えっと。あ。此方こそよろしくお願いします。」

涼歌さんは、ニコツと微笑みながら握手をして来た。

うん。やっぱり綺麗だ。

「急な話でごめんなさいね。でも、何事も早い方がいいと思って。」

「いえ、謝らなくても良いですよ。」

「そうですよ。コイツなんかに謝る必要は無いですよ。」

はははっ。何か目頭が熱くなってきたぞ。

「でも、何故僕を養子に？」

「そ〜ねえ。一言でいうと。一目惚れってヤツね。」

「ひ、一目惚れですか。」

顔が引き吊る。

「そう。だから養子になって欲しいのよ。大和さんも了承してくれてるから後はあなたが良いと言ってくれば・・・」

「お断りします。」

「え？」

涼歌さんが言い終わらない内に断った。

「はあゝ。まったくお前は。」

「どうしてかしら？」

大和さんが呆れながら言い、涼歌さんが啞然として尋ねてきた。

「僕は誰の養子にもなる気は在りません。こんな僕に声を掛けて

くれた事はありがたいと思っています。」

「……………」

涼歌さんは黙って僕の話しを聞いている。

「僕は此処の生活で十分なんです。今さら家族が出来たって戸惑うだけです。それに僕は……………いや、何でもありません。とにかくこの話しは無かった事にして下さい。」

「わかったわ。」

涼歌さんはわかってくれたみたいだ。よかった。

「……………話し合いだけで済ましたかったんだけどね。仕方がないか。」

「え？どういこと。」

溜め息混じりで言う涼歌さん。そして、僕の目の前にはゴツイスツ姿の男の人が二人。

て、あれ？こんな人達いたっけ？ん？何この人達。

「あ、あの〜。」

「失礼します。」

ズドツ！

僕の視界は真っ暗になった。真っ暗になる直前。大和さんが泣きながら「サヨナラ」と言っていた。僕は思った。

嘘泣きだな。と。

「う、ん……。」

あれ？此処は？僕はたしか、『マイホーム』で涼歌さんに養子にならないかと言われて、それを断って、それからスーツ姿の男の人に殴られて。

「あら。目が覚めた？ようこそ雨宮家へ。」

なるほど。どうやら僕は誘拐。じゃなくて強制的に連れてこられたのか。

周りを見渡すとどうやらリビングのようだ。結構広い空間にソファやテレビ。テーブル、本棚なんてものがある。ちなみに僕が寝ていたのはソファアームみたいだ。

僕はソファアームから起き上がり。まだ痛む腹を擦りながら涼歌さんがいるテーブルに向かった。

「で、涼歌さん。」

僕を養子に選んだ本当の理由を教えてください。」

「そうね。わかったわ。あなたを養子に選んだ理由はね。」

少し間を開けて涼歌さんは口を開いた。

「娘達を護って欲しいのよ。」

「は?」

「後で紹介するけど、私には三人の子供がいるの。それで、その三人をあなたに護って貰いたいの。」

「何で僕なんですか？そんなに心配ならあのスーツ姿の男人達みたいな人をボディガードにすればいいんじゃないんですか？第一、僕は非力な一般人ですよ？」

「そんなことはないわ。あなた以外に三人を護れる人なんていないと思うわ。」

「な、何故ですか？」

「あなたが……。『breaker's』にいたからよ。」

「ッ!？」

「たった5人の最強の戦闘集団『breaker's』。決して善良な市民には手を出さず、警察でも手を出さないほど凶悪な暴走族や犯罪者などを片っ端から叩き潰して来た。そして、周りからこう呼ばれるようになった。『breaker's』（破壊者達）」

「……………」

「ごめんなさいね。あまり過去の詮索はしない方が良くののかも。いや。してはいけないのだけど。『breaker's』にいたあ

なた以外に娘達を任せられないと思ったの。」

「……………」

「でも。それよりもあなたには本当に家族になって欲しいと思ったの。あなたの事は大和さんに聞いたわ。」

「そうですね……………」

「あなたが、両親に捨てられた事を。ね。」

そう。僕は両親に捨てられた。それもまだ生後半年も経たない内に捨てられた。『マイホーム』の門の側に手紙と一緒に置いてあったと大和さんに聞かされた。そして、その手紙も見せてもらった。手紙にはこう書かれていた。

『宜しく御願います。』

とだけ書かれていた。

許せなかった。僕を捨てた両親をとて憎んだ。憎んで憎んで、それでも憎んだ。

でも、心の奥底に会いたいと思う自分がいた。

そして、会いに行った。父親は見つからなかったが、母親は『マイホム』からは結構遠くなるが見つかった。5時間掛けて行った母親の家には、既に家庭があった。

母親が言うには僕は好きでも何でもない男と出来た子供があなたなの。だから捨てた。こっちは家庭があるしもう此処には来ないでね。と、追い返された。

頭が真っ白になった。それと同時に何もかもがどうでもよくなっ

た。『マイホム』に帰った後は酷かった。施設の誰とも顔を合わせることもなく。毎日夜遅くになると近くの繁華街に出向き、不良共を片っ端から叩き潰した。学校にも行かず、ずっとこんなことを続けていた。

周りの人の迷惑？知ったこっちゃない。そう思っていた。

彼らに出会うまでは。

（3年前）

「よお。お前が『壊し屋』だな？」

僕はその頃『壊し屋』と呼ばれていた。今まで沢山のカス共を叩き潰してきたからなあ。

「単刀直入に言う。…………お前、俺の仲間になれ。」

「はあ？」

「だから。仲間になれ。」

「嫌だね。まあ、どうしてもって言うのなら。」

俺は身構えた。目の前の奴に集中し、

「俺を…………。」

脚に力を込めて。

「倒してみろやああああ！！！！！！！」

奴に向かっていった。

「気に入った。やはりお前は仲間欲しい。」奴は慌てる素振りもなく、ただ立っていた。

「俺の名は『轟清流』(とどろきせいりゅう) 轟流総合武術の次期師範だ。よろしくな。」

これが清流との出会い。そして、『breakers』の始まりだった。

最初は俺と清流だけだったけど、清流は気に入った奴を仲間にしていった。そして、俺達が5人になった時、仲間の一人が俺達に名前が欲しいと言い出した。

「俺達の目の前にはいつも壁がある。その壁をぶっこわしながら俺達は突き進む。」

清流が呟くように言った。

そして俺達は『breaker's』（破壊者達）になった。

（現在）

「母親に会った後むしゃくしゃしていた僕は『breaker's』に入ったんです。」

涼歌さんには「ただ、暴れたかったから『breaker's』に入った。」と、言った。清流達の事は話さなかった。

いや、話したくなかった。たとえそれが母親になる人でも。話したくはない。

「そうなのね。……でも。」

涼歌さんは僕に近づきながら優しく語りかける。

「あなたが『breaker's』にしようがいまいが関係ないわ。」

僕を優しく抱き締めながら……。

「私はあなたを養子だなんて思わない。大切な息子として、掛け代えのない大切な存在として。」

涼歌さんは泣きながら。

「あなたを。愛します。」

と、言った。

「ありがとう。」

そして。僕は決めた。

「母さん。」

『雨宮粹繕』になることを。

どんな事があるかと。この家族を……………。

護ってみせる。と。

(後書き)

キャラクタープロフィール

天道粹繕

男・16才

戦闘集団『breakers』の一員。解散後は、『マイホーム』という施設で平和に暮らしていた。だが、粹繕を養子にしたい。と言って現れた、雨宮涼歌に半ば拉致られながら強引に雨宮家の一員になった。

顔・中の上

身長・175cm

特技・轟流総合武術が使える。

特徴・伊達眼鏡を掛けている。

雨宮涼歌

女・40代らしいがどう見ても20代

粹繕を拉致?した張本人。実は世界規模の大企業の社長。その為家には帰ってくることは少ない。娘達を護ってくれる存在として、そして息子が欲しい!という彼女自信の願いの為に粹繕を拉致。養子として迎えた。

顔・上の上

身長・165cm

特技・拉致（粹繕談）

轟清流

男・17才

粹繕を仲間にし、その後『breaker's』を名乗り、暴走族等を叩き潰していった。『breaker's』解散後は海外で生活しているとか。轟流総合武術の次期師範で、粹繕に武術を強制的に叩き込んだ。

顔・上の下

身長・180cm

特技・轟流総合武術

大和庄次郎

男・永遠の10代（50才）

『マイホーム』の管理人。以上。

「俺だけ酷くない？」 by 大和

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7203i/>

Breaker's

2010年10月11日00時25分発行